

2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果

－日本私立看護系大学協会 大学教育委員会－

佐藤みつ子（了徳寺大学）

1. 9月以降の実習変更予定について

私立看護系大学（以下、私立とする）は、85.8%であった。

2. 変更予定科目

変更予定科目は、老年看護学実習 91.9%、在宅看護学実習 91.8%、小児看護学実習 88.8%、母性看護学実習 86.8%の順で、8割が変更をしていた。

3. 変更予定の項目と主な内容

1) 「臨地日数、時間の短縮」80.8%、「学内実習へ変更」79.6%、「遠隔授業へ変更」42.3%、「実習時期の変更」41.1%、「実習施設の変更」40.5%であった。

2) 専門領域別の変更

以下、平均値と比較して記述する。

①日数、時間短縮

私立全体の平均 80.8%、成人看護学実習 87.8%、母性看護学 84.7%、看護の統合実習 83.1%、小児看護学 81.1%の4領域の変更があった

②実習時期の変更

私立全体の平均 41.1%であり、公衆衛生看護学 63.7%、助産学実習 60%、看護実の統合と実践 53.1%で、大幅に変更した大学とそうでない大学と差があった

③実習施設の変更

私立全体の平均 40.5%であり、看護の統合と実践 61.2%、在宅看護学 45.6%、老年看護学 45.6%、助産学実習 42.5%であり、大学間に差がみられなかった

④学内実習への変更

私立全体の平均 79.6%、看護の統合と実践 93.9%、老年看護学 84.8%、母性看護学 83.9%、小児看護学実習 83.5%であり、多くの領域実習で変更を余儀なくされた。

⑤遠隔実習への変更

私立全体 42.3%、看護の統合と実践 49%、在宅看護学実習 48.5%、公衆衛生看護学実習 48.4%、精神看護学実習 46.6%、成人看護学実習 46.4%であった。臨地実習の時間の約 50%を遠隔実習に変更していた。

4. 感染予防対策

1) 学生指導内容

学生への感染予防対策の指導内容は、概ね 80%から 98%であったが、指導内容が低かった項目は、PCR 検査 53.1%、実習着の洗濯 89.4%、行動記録表の大学への提出 78.1%であった

感染防護用具の購入者

| | 大学側 | 施設側 |
|--------------|------|------|
| マスク | 66.9 | |
| ケア時のサージカルマスク | 66.3 | 17.5 |
| フェースシールド | 80 | |
| 使い捨てエプロン | 50 | 42.5 |
| 使い捨て手袋 | 47.5 | 45.6 |
| 手指消毒剤 | 75.6 | 15.6 |

2) 実習施設と調整・確認していること 上位項目

学生の体調管理 70.6%、学生の実習可否の判断基準 70.3%、学生が濃厚感染者になった場合の対応 69.5%

5. 学内実習・遠隔実習に変更したことによる課題と今後に向けて(要望)

1) 変更したことによる課題点

<学生側の課題>

- ①コミュニケーションの経験の不十分さにより、就職後につまずく割合が今まで以上におこる。
- ③学生の看護観が広がりにくいのではないかと 看護観の未形成
- ④学内において技術の練習や確認ができないまま実習を迎えることになる。
- ⑤完全オンライン代替実習を行う領域もあるので、実習後半になっても対患者、対看護師といった基本的なところが実習生として経験がつかさなっていない学生がいるであろうことが懸念される。
- ⑥代替実習を行っているが、実際に生きている・生活してきた人間の現実に、学生たちが出会い看護援助を行うことでの体験の限界がある。
- ⑦遠隔授業形式の場合、パソコンの前に長時間いることで眼精疲労等への配慮が求められた。
- ⑧遠隔授業形式だったため、インターネット環境の問題でカンファレンスの途中で参加できない状況などがあった。
- ⑨さまざまな領域で実習することにより、働く看護師をみながら自分のキャリアを考える機会となるが、その機会を逸しているためイメージできないまま就職先を決定してしまう。
- ⑩学生の探求心を刺激する機会が少なく学びがこじんまりしてしまったと感じている。

- ⑪それは国試学習の取り組みにも影響し、状況と関連付けた理解がしにくいように感じている。
- ⑫臨地で実習を経験できる学生とできない学生が混在しており学習の機会の不平等が生じている。
- ⑬観察技術やコミュニケーションの問題

<教員側の課題>

- ①教育経験の長い教員との「臨地実習とは」の考え方が異なる。
- ②1病棟あたりの学生数が6名から3名に減少され、病棟数が増えたことにより、学生に対する教員数をこれまで以上に増やさなければならない状況が生じた。
- ③教材の準備、各実習施設との打ち合わせ、学内の教育システムの変化、会議の増加など、業務が膨大に増えた。
- ④オンラインでの指導者とのやり取りについては、接続状況やPCなど機器備品も現存で行うには慣れるまでに時間を要した。
- ⑤臨地実習していないということでの学生の不安が大きく対応が大変だった。
- ⑥コロナ下の実習のあり方について、教員間にも様々な反応があった。臨地実習の意義、重要性等もう一度考え直す必要があると考えている。
- ⑦教員自身がシュミレータ教育に精通しているわけではない状況で、学生の反応に対して臨機応変に実習をデザインしていくことの難しさも感じている。

<実習内容および計画に関する課題>

- ①実習目標を到達可能にするような学内実習を組む。
- ②手術件数が減少しているため、周手術期の受け持ち患者の選定が難しい。
- ③看護に対する思いや取り組み方、患者への接し方等十分に伝えることができず、実習が不可能になると目標の到達困難に陥る可能性が高いと考える。
- ④学生の学修状況を直接確認できていないことで、学習がどの程度進んでいるか、何に困っているのか把握することに難しさがあった。
- ⑤実習ができないことによる到達度の不足。

<実習環境全般に関する課題>

- ①附属施設を持たない養成校には影響が大きい。
- ②2021年度も臨地に行けない学生が出る状況により、施設の新規開拓が続いている状況である。
- ③学内での実習室の調整（他領域との重複）。
- ④実習病院の協力を得て遠隔授業で臨床講義を実施していただくことができたが、実習計画変更の都度に調整が必要となり、臨床側にも負担が生じた。

- ⑤教員のマンパワーや力量、シュミレータの保有台数等さまざまな要素により増減するのではないかと感じている。
- ⑥学内で実際の看護実践場面を学生患者役で行うことで、物品の確保が必要となり、学生数に応じて購入する必要があった。

<卒後に予測される学生および臨床側の課題>

- ①患者に接する機会の減少は、今後、就職した際のリアリティーショックに繋がる可能性が高くなることも考えられる。
- ②学内・遠隔実習しか経験できていない学生たちが卒業後に臨床でどのような状況となるのか、臨床が混乱をきたさないか不安がある。

<その他>

- ①親から行かないといけないのかと言う訴え。

2) 今後に向けての要望

<実習施設に関する要望>

- ①代替実習に実習病院の協力がえられる制度があればよい。

<実習環境に関する要望>

- ①シュミレーションセンターの推進やVRの導入
- ②学内や遠隔実習に変わる際、学習の質の担保、教員負担の軽減の観点から、大学を超えて教員相互で協力できる体制を整えてほしい。
→事例の共有、電子カルテの共有クラウド管理で、サーバーのない学校等も閲覧できるような工夫等。

<教育課程に関する要望>

- ①1か月遅れの実習が予測されるため、実習の時期、期間をある程度自由にすることができるか。
- ②看護基礎教育における実習という科目の時間も内容も再検討し、看護継続教育への移行も検討する。

<就職先への要望>

- ①学生の学修体験の不足については、看護基礎教育、現場での卒後教育が連携しあい補完していくことが求められる。
- ②現場の医療従事者とのコミュニケーションも機会が少ないため、卒業後に苦労するのではないかと案じている。卒業した時に現場で温かく迎えてもらえるよう念じている。